

2008年12月22日

友達を信じるな？良すぎるものは信じるな？マドフの教訓 (前編)

今月の12月11日のバーナード・マドフ逮捕によって明るみに出た巨大な詐欺事件が、世界の金融界を揺さぶっています。

この事件は、一個人の犯罪として処理されるべきものではありません。ここには、資産運用ビジネスに関連する本質的な問題が提起されているのです。大切な財産の管理を委託する、あるいは、業者の立場からいえば受託するということは、当然過ぎるくらい当然のこととして、信頼を基礎としているのです。その信頼の基礎が崩れ去るということは、資産運用ビジネスのビジネスとしての基礎が失われるということです。ついにマドフは、その基礎を壊してしまいました。マドフだけではありません。サブプライム問題として明るみに出てきた証券ビジネスの乱脈ぶりも、投資家の信頼を裏切るものでした。マドフは、止めを刺したに過ぎないのです。

基礎が壊れてしまった資産運用ビジネスは、本質的に自己改革しない限り、再生しません。資産運用ビジネスは、拡大し成熟する過程の中で、なにか大切なものを見失ったのです。特に、最近10年間の劇的な資本市場の構造変化の中で、絶対に見失ってはいけない価値観を、見失ったような気がします。

私は、このコラムの連載を始めるにあたって、その第一回に、「プロの投資が非常識だというわけではありません。ただ、一つの可能性として、原点にあった良識・常識の上に、高度に技術的な要素が付け加えられた結果として、原点が見えにくくなっていることも否定できません。」

と書きました。原点への回帰を、原点の良識への回帰をコラムの課題としてきました。しかし、そのときには、まさか信頼という基本中の基本へまで回帰しなければならなくなるとは、想定しませんでした。残念ですが、改めて見失われた倫理的基礎へまで回帰してみようと思います。

マドフ事件の全容は、別途、緊急の特別レポートの形で、この同じサイトに連載していますので、そちらをご覧ください。ここでは、角度を変えて、お金を預けるときには、何を信じたらいいのか、誰を信じたらいいのか、という点を考えてみたいと思います。

バーナード・マドフは証券界の大物で、信頼に値する人物として知られていました。

ナスダック会長などという要職も歴任していました。アスコットというファンドを設定して、マドフの運用資金を集めていたガブリエル社のエズラ・マーキン(Ezra Merkin)氏という人物がいます。この人は、あの自動車のGMの金融部門 GMAC の会長の職にあります。マドフも、マーキン氏も、ともにユダヤ社会の尊敬される人物であり、コミュニティの重要な人物なのです。その関係で、ユダヤ系の大学や財団が今回の事件大きな被害者になっています。事件の卑劣性は、自分が属するコミュニティの中で信頼される地位にあることを悪用して、自分のコミュニティを裏切

ったことです。親友を騙したのです。親友に騙された人の痛みは、金銭的損失を超えてはるかに大きいことでしょう。では、お金を預けるときは、親友を信じるな、ということなのでしょうか。

また、マドフの過去の運用成績が表向き極めて良かったことも問題だとされています。事件が明るみになった今では、「信じるわけにはいかないほどに、運用成績が良すぎた」などという人もいます。過去 10 年間でマイナスになった月は数えるほどで、チャートを見ると、一直線の右肩上がりです。確かに良すぎます。良すぎる成績は信じるな、というのは、もっともらしいようですが、では何を信じたらいいのでしょうか。まさか、ちょっと悪いくらいの成績がいいのだ、ともいえないでしょう。

投資という金融商品の難しさは、見えないことです。

目に見える商品は、目で見て確かめて買えばいいのです。投資は見えません。見えるのは、運用者の顔、一緒に投資している他の投資家の顔、過去の実績を絵にしたチャートくらいです。見えるものに嘘があれば、もうどうしようもないでしょう。ですから、今回の詐欺は、まさに禁じ手中の禁じ手であり、ビジネスの根幹を直撃したということなのです。では、投資家は、どうすればいいのか、見えないものをどのように確認するのか、続きは、次回です。

次回更新は、1/8 となります。よろしくお願ひ致します